東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

「東大寺献物帳」記載「御鏡弐拾面」の研究：鏡背文様を中心にして

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1994-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/745

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「東大寺献物帳」記載「御鏡弐拾面」の研究

――鏡背文様を中心にして――

高橋宗一

I

天平勝宝八年（西暦七五六年）五月二日、聖武太上天皇が崩御された（註1）。聖武帝は、神亀元年（七二四）から天平感宝元年（七四九）まで天皇位にあり、その間、中国の唐王朝を手本に我が国の中央集権国家強化・確立を目指したことでよく知られている。遣唐使をたびたび送り、帰国者たちを国家の重要な地位につけ、政治・経済・文化などあらゆる面において、中国から積極的に学んでいった。文化面からみれば、絵画・彫刻・工芸品などの中国の文物、いわゆる美術品を数多く我が国にもたらし、中国の模倣ともいえる当時の日本文化の形成を一層推し進めた人物といえよう。

また、聖武帝は、国家体制作りのために仏教を重用し、国内諸国に国分寺・国分尼寺の造立を命じ、仏教による「鎮護国家」形成を目指した。この聖武帝の仏教に対する姿勢は、後に自らも仏法に帰依し、「法満」の法名を持つまでに至るのである。その聖武帝の仏教信仰の凝集が、平城京の東で行われた東大寺造営とその本尊・盧舎那仏造立ともいえる。しかし、この計画は、国家の大事業として行われ、完成までに長い年月を要することになった。東大寺および盧舎那仏の完成は、ともに聖武帝の在位中にはなしえなかったのである。幸いなことには、造営途中ではあったが、聖武帝は、孝謙天皇（聖武帝の皇女）への譲位後の天平勝宝四年（七五二）四月九日に行われた東大寺盧舎那仏の開眼会、つまり盧舎那仏の公式的な完成儀式に、光明皇太后・孝謙天皇とともに参列することはできたのである。この行事に参加できたことは、自ら仏法に帰依し、仏教による「鎮護国家」を求めた聖

武帝にとって、この上ない喜びであったにちがいない。その後も完成に向けて、東大寺ならびに盧舎那仏の造営は続けられていくが、聖武帝はその完成を目にすることなく、崩御の日を迎えたのである。

聖武帝の七々忌（四十九日忌）にあたる同年（七五六）六月二十一日、光明皇太后は、聖武帝の日頃使用され、愛玩された品々を、聖武帝の盧舎那仏への帰依を思いやって東大寺に奉献した。この時の献納した品々の目録と由緒を記したものが、「国家珍宝帳」と呼ばれる「東大寺献物帳」である（以下「献物帳」という）。

この「献物帳」の巻首には、「太上天皇の奉為に国家の珍宝等を捨てて東大寺に入るるの願文　皇太后御製」とある。この願文に続き、「献盧舎那仏」として、以下に東大寺盧舎那仏に献ずる品々が記される。この記述は、いわば東大寺盧舎那仏に対する献納目録というべきところである。「献物帳」の最後は、光明皇太后の、今は亡き聖武帝への切々たる思いと盧舎那仏国土への到彼岸の願いで結ばれている。

この「献物帳」に記載されている献納目録によれば、聖武帝が着用した袈裟や天武天皇以後の歴代天皇に伝えられた厨子、その厨子に納められていた書跡類をはじめとして、聖武帝ゆかりの楽器、調度品など日々の生活用品にわたる約六百余点が、東大寺に施入されたことがわかる（註2）。中国文化に傾倒していた時代に生きた聖武帝ゆかりの品々が、献納宝物とされたのならば、その中に、遣唐使たちが中国から持ち帰り、聖武帝に送った品々も含まれていることは当然のことであろう。

献納された宝物のうち、今なお東大寺正倉院に伝えられているものがあることは周知のことである（註3）。本論で取り上げる「御鏡弐拾面」も、そのうち十八面が今日まで伝わり、それらすべてが唐からの舶載鏡といわれている（註4）。また、現存する十八面の鏡は、中国唐時代の鏡、いわゆる「唐鏡」のなかでも、美術工芸的な面からみて、超一流の鏡と評価されるものでもある。「御鏡弐拾面」と記された鏡は、おそらく遣唐使が唐で制作された鏡を持ち帰り、聖武帝に献上したものなのであろう。

近年になって、中国において、唐時代の鏡の研究に進展がみられ、鏡の名称や分類、その制作時期についての新たな考察が発表されている（註5）。東大寺正倉院に伝わる献納宝物の鏡は、我が国からみれば「舶載鏡」ということになるのだが、中国（唐）において制作された唐時代の鏡、つまり「唐鏡」の作例とすべきものである。近年の研究成果に照らしあわせて、再考もしくは再評価する点があるように思われる。本論では、献納宝物の「御鏡弐拾面」について、献物帳の記載の検討と現存する鏡の観察を行うとともに、近年の研究成果に基づき、中国出土の唐鏡における位置付けを試みたいと考えている。

II

「献物帳」には、「御鏡弐拾面」についてどのような記載がなされているのだろうか。まず「御鏡弐拾面」の記載を検討することから始めたい。

御鏡弐拾面

A 八角鏡一面重大卌八斤八両　径二尺一寸七分　鳥獣花背　緋絁帯　八角榲匣盛

B 円鏡一面重大卌三斤八両　径一尺五寸八分　鳥花背　緋絁帯　八角榲匣盛

C 八角鏡一面重大十三斤十五両　径一尺四寸五分半　鳥獣花背　緋絁帯　八角榲匣盛

D 八角鏡一面重大十四斤十五両　径一尺四寸七分　漫背　緋絁帯　八角榲匣盛　「己上並緋綾嚢」

E 円鏡一面重大七斤五両　径一尺二寸「五」九分　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

F 円鏡一面重大六斤一両　径一尺二寸「六」五分　漆背　金銀平脱　緋絁帯　漆木匣緋綾嚢盛

G 八角鏡一面重大五斤十一両　径一尺一寸　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

H 八角鏡一面重大四斤三両　径一尺平螺鈿背　紅羅纈帯　漆皮箱緋綾嚢盛

I 円鏡一面重大三斤十三両　径九寸一分　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱「緋綾嚢盛」

J 円鏡一面重大三斤「七」八両　径九寸　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

K 円鏡一面重大三斤十二両　径九寸一分　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛　「漆箱暫留借盛緋綾袒」

L 八角鏡一面重大四斤「二」両　径九寸六分　漆背　金銀平脱　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

M 八角鏡一面重大三斤四両　径九寸二分　平螺鈿背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

N 八角鏡一面重大五斤十三両　径一尺一寸三分　花鳥背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

O 円鏡一面重大六斤五両　径一尺七分　花鳥背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

P 八角鏡一面重大六斤一分　径一尺七分　槃龍背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

Q 八角鏡一面重大五斤一両二分　径一尺一分　花鳥背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

R 八角鏡一面重大四斤七両一分　径一尺二分　鳥獣花背　緋絁帯　漆皮箱緋綾嚢盛

S 円鏡一面重大四斤十二両　径九寸三分「雲」花鳥背　緋絁帯　漆皮箱緋綾榲盛

T 円鏡一面重大四斤十五両　径九寸二分　山水花虫背　緋絁帯　漆皮箱緋綾榲盛

「御鏡弐拾面」の記載にある「　」内の文字および『　』内の文字は、「献物帳」につけられている付箋に記されたものを示す。また、各鏡の記載の上にあるA～Tまでの符号は、説明の便宜上、筆者が付したものである。

この「御鏡弐拾面」の記載をみると、その記載は、原則として、次のような構成になっていることがわかる。

鏡Aの記載の場合は、「八角鏡一面重大卌八斤八両　径二尺一寸七分　鳥獣花背　緋絁帯　八角榲匣盛」とあり、これは次のような構成になっている。

①　鏡一面＋重大　②　＋径　③　＋　④　背＋　⑤　帯＋　⑥　匣盛

このような記載構成に基づいて、各鏡の記載はなされているが、①から⑥までの部分に、各鏡ごとの違いがでてくる。

①の部分からみていくと、鏡Aの①の部分には、「八角」とある。鏡C・D・G・H・L・M・N・P・Q・Rも同様である。それに対して鏡B・E・F・I・J・K・O・S・Tには「円」とある。つまり、この①の部分には鏡の形態が示されていることがわかる。「円」とある鏡は、円形の鏡のことであり、「八角」とある鏡は、八角形の鏡である。しかし、この場合の八角形は、正八角形という意味ではなく、鏡の縁が八つの弧により構成されているという意味で、一般に、八花形・葵花形と呼ばれる形を指す。

次に、②の部分には「卌八斤八両」とあり、その前に「重大」とあるのは、この部分は鏡の重量を示す。他の鏡の場合も同様である。

③の部分には、「二尺一寸七分」と長さが記され、その前に「径」とあることから、この「径」は、鏡の長さ、つまり鏡の幅、ないしは鏡の直径を意味している。他の鏡の場合もこれは同様である。

④の部分には、「鳥獣花」とある。これに続く「背」の意味するところは、鏡の背面（鏡背）のことであり、「鳥獣花」の「背」とは、鏡背に表されている文様の題材が「鳥獣花」、つまり、鳥・獣（動物）・花ということである。鏡C・Rの鏡背の文様が鏡Aと同様に「鳥獣花」である。鏡B・N・O・Qの場合は、「鳥花」もしくは「花鳥」とあるので、鳥と花によって鏡背の文様が構成されていることになろう。鏡Sの場合は、「花鳥」の記述の横に「雲」と書き加えられているので、花、鳥の他に雲の文様があるのだろう。また、鏡Pの鏡背には「槃龍」と呼ばれる龍の一種が文様として描かれ、鏡Tには、「山水花虫」つまり、山、海、花、虫が表されていたと思われる。

また、この④の部分には、鏡背の文様を記したものだけではなく、鏡背装飾の技法が記されているものもある。たとえば、鏡E・G・H・I・J・K・Mの七面の鏡背には、「平螺鈿」とある。この「平螺鈿」とは、アワビやサザエ、夜光貝の殻を研磨したあと、文様の形に裁り、鏡背に嵌め込む、もしくは貼りつける加飾技法のことである。先の七面の鏡は、鏡背にこのような装飾がなされている鏡ということになる。しかし、どのような文様構成であるかの記載はない。次いで鏡F・Lの二面の場合は、「漆背」とあり、それに続いて「金銀平脱」とある。「平脱」とは、漆工芸の装飾技法の一種で、金や銀の薄板を文様に切って漆面に貼り、さらにその上から漆を塗り込めた後、一面に研ぎ出すか、文様部分の漆膜を刃物で剝ぎ起こして文様を表出させる技法のことである。つまりこの二面の鏡は、鏡背に漆をぬり、そこに文様を切り出した金や銀の薄板を貼りつけたものと思われる。しかし、これらの鏡の文様構成についても記載はなにもなされていない。また鏡Dには、「漫背」とあり、これは鏡背になにも文様のない鏡、いわゆる素文鏡であることがわかる。

以上のように④の部分、鏡背についての記載をみてみると、そこには、鏡背に描かれる文様、鏡背の装飾技法について記されていることがわかる。つまり、鏡背の文様や装飾というのは、鏡を識別するために重要な要素として認識されていたのである。それに対して、鏡の正面（鏡面）は、光を反射させる所であるから、通常なにも装飾を施さないので、この鏡面については、「御鏡弐拾面」の献納目録には、なにも記載されていない。

⑤の部分には、「緋絁」とある。鏡Hを除く十九面も同様に「緋絁」とある。「緋絁」は「ひのあしぎぬ」、つまり赤い色の太くあらい糸で織られた絹である。この「緋絁」で作られた帯状のものを「緋絁帯」と記している。では「帯」とはなんであろうか。鏡背の中央には、鈕（ちゅう）とよばれる突起物がある。いわば鏡を持つときに必要なつまみのようなものだが、その鈕には貫通した穴があり、その穴に鏡を持つためのひも状のもの（緒）を通す。「帯」とは、その緒につけられる装飾用の織物のことである。つまり、「御鏡弐拾面」として記載された鏡のうち、鏡Hを除いた他十九面の鏡に「緋絁」の「帯」がつけられていたことになる。ただし、「紅羅繡帯」とある鏡Hの場合に

は、「緋絁」の「帯」の代りに、刺繍の施された赤い羅で作られた帯がつけられていたのであろう。「羅」とは、網目状の透けた薄い絹織物のことである。

⑥の部分には、「八角榲」とある。これに続く「匣盛」とは、箱、つまり鏡の収納箱のことである。この収納箱の形・材質が「八角榲」、すなわち榲（すぎ）で作られた八角形の箱のことを「八角榲匣盛」と記している。鏡Aのほか、鏡B・C・Dの収納箱も榲（すぎ）で作られた八角形の箱である。この⑥の部分には、鏡の収納箱の形・材質が記されているのだが、前記の四鏡以外の鏡の場合、特に収納箱の形については記載されていない。これらの鏡の収納箱の形は、鏡の形態、つまり円形の鏡か八角形（八花形）の鏡かによって、鏡自体と同じ形の収納箱におそらく決まっていたからであろう。そしてこの場合の収納箱の材質は、鏡E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・Tの十五面は「漆皮」の「箱」、鏡Fの一面だけが「漆木」の「匣」ということになる。「漆皮」とは、牛皮や鹿皮を素材として型抜きで器形を作り、これに直接あるいは麻布を張ったのち、漆を塗って仕上げる技法である。「漆木」とは、漆塗りの木製ということである。ただし、鏡Lの場合には、付箋に『漆箱暫留借盛緑綾箱』とあり、献納当時の収納箱は「漆皮箱」であったが、後世、一時的に緑色の綾の織物の箱に入れられていたらしい。

鏡Aの記載の場合は、その記載は①～⑥の部分までであるのだが、他の鏡の記載にはもうひとつ別の記述が付け加えられている場合がある。付箋に記されたものをいれると、鏡D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・S・Tの十六面の記載には「緋綾嚫盛」とある。「嚫盛」の「嚫」とはうちばりのことで、つまり「緋綾嚫盛」とは、鏡の収納箱の内側を飾る装飾、箱の内側に「緋綾」を貼った装飾が施されていることを意味している。

「献物帳」に記載されている「御鏡弐拾面」の記述をみると、「御鏡弐拾面」として数えられている鏡には、一面ずつそれぞれに関して、①鏡の形態、②重量、③寸法、④鏡背の文様、⑤鈕帯、⑥収納箱について記されていることがわかる。さらに、収納箱の内部装飾などについても記されている。このようにひとつひとつの鏡について詳しく記されていることから、正倉院に伝来する鏡の中から「献物帳」記載の鏡を比定することもできるのである。

では次に、「献物帳」記載の鏡と比定されている正倉院伝来の鏡について、とくに鏡の特徴となる鏡背の文様を中心にみていきたい。

現在、東大寺正倉院に伝わる宝物には、整理番号ともいうべき分類がある（註6）。「献物帳」記載の宝物の多くは、北倉に納められていることから、「御鏡弐拾面」の現存する鏡も「北倉四二」と区分され、各鏡はさらに第一号から第一八号までに呼びわけられている。

〈第一号　鳥獣花背八角鏡　図1〉

この鏡は、「献物帳」記載にされている鏡Aに当てられている。鏡背の文様は、太い界圏によって内外の二区に分けられる。内区には鈕の左右に宝相華にのる鳳凰が向き合い、上方部分に飛雲文、下方部分に山岳文を配している。外区には疾駆するの霊獣（獅子）を上方・下

図1　鳥獣花背八角鏡　第1号

図2　鳥獣花背円鏡　第2号

図3　鳥獣背八角鏡　第3号

方それぞれに一匹ずつ、左方・右方に霊獣（鹿）一匹ずつをみな右旋回に配し、その間に宝相華を喰わえる双鳥文を配している。

〈第二号　鳥獣花背円鏡　図2〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Bに当てられる。鏡背の文様は、中帯をもつ界圏によって内外区に分けられる。内区には、大きな鈕を中心にして、二羽の鳳凰と二羽の鴛鴦がそれぞれ相対し、その間に草花文を置く。外区には、二匹の獅子と二羽の鳳凰を交互に配し、その間に唐草文を置く。外縁帯には、雲文を等間隔に八つ置いている。

〈第三号　鳥獣背八角鏡　図3〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Cに当てられる。鏡背文様は鈕を中心にして、その左右に綬を喰わえ羽をひろげ雲にのる鳳凰が向き合い、上方部分に疾駆する鹿、下方部分に獅子の霊獣を配し、その間に飛雲文を点在させている。

〈第四号　漫背八角鏡　図4〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Dに当てられる。鈕を中心に界圏をめぐらすが、文様はまったくない。

〈第五号　平螺鈿背円鏡　図5〉

現在この鏡は、破損して十四個の小片となっており、全姿をみることはできず、鏡背文様についても不明である。しかし、小片にみられる鏡の外縁部分の弧の曲がり具合から推定した当初の鏡の大きさ、ならびに小片の一部に残る螺鈿などから、「献物帳」記載鏡Eに該当すると考えられている。

〈第六号　漆背金銀平脱円鏡　図6〉

この鏡は、十八片に破損していたが、現在、鏡体は接合復元されている。しかし、装飾していた金銀平脱片の一部が現存するだけなので、鏡背文様の復元はできない。鏡の大きさや装飾技法から、「献物帳」記載鏡Fに当たると考えられている。

〈第七号　平螺鈿背八角鏡　図7〉

この鏡は、現在、八片の破片に不足部分を銀板で補って接合復元されている。鏡背文様は、螺鈿技法で表現している。鈕を中心に界圏により、内外の二区に分けられる。内区には、宝相華文を四方に対称的に置く。外区には、四方に宝相華文を置き、その各々に一対の尾長鳥をとまらせ、その間に宝相華文を配す。「献物帳」記載鏡Gに当たる鏡と考えられている。

〈第八号　平螺鈿背八角鏡　図8〉

この鏡は、十三片に破損していたが、現在は銀一片を補って復元されている。鏡背文様は、鈕を中心に宝相華文を四方に置き、その外周に宝相華文八つと小花文八つを交互に配す。螺鈿技法で飾られているが、文様を含め鏡背面は全体的に修理されていると思われる。「献物帳」記載鏡Hに当てられている。

〈第九号　平螺鈿背円鏡　図9〉

この鏡は、五片に破損したものを復元している。鏡背文様は、連珠文の帯圏により内外の二区に分けられている。内区には鈕を中心に宝相華文が四方に配されている。外区にも宝相華文が四方に配される

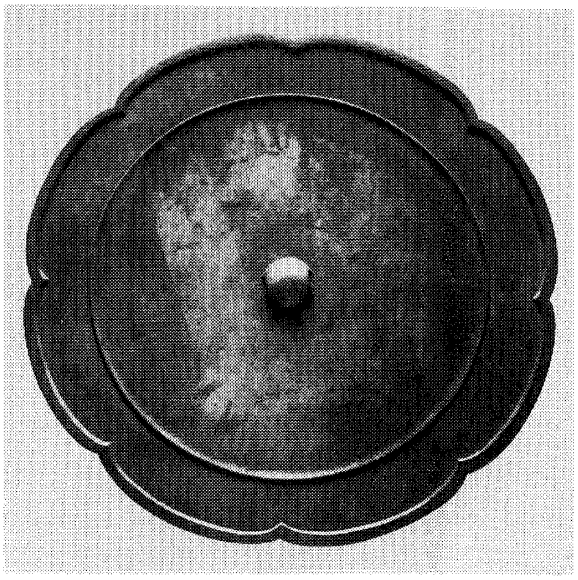

図4　漫背八角鏡　第4号

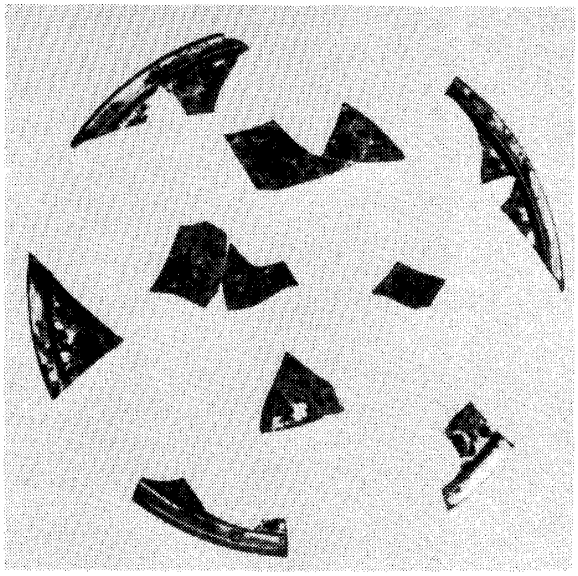

図5　平螺鈿背円鏡　第5号

図6　漆背金銀平脱円鏡　第6号

が、その間に小花文と方形桝形文を置く。文様は螺鈿により表現されている。「献物帳」記載鏡Iに当てられている。

〈第一〇号　平螺鈿背円鏡　図10〉

この鏡は、現在、破片四片による接合復元がなされている。鏡背文様は、連珠文圏によって、内外二区に分けられている。内区には鈕を中心に宝相華文を配し、外区には四方に宝相華文を配し、その間に草花や蕾を置き、相称的な構図をとる。文様は、螺鈿技法により飾られている。「献物帳」記載鏡Jに当てられる。

〈第一一号　平螺鈿背円鏡　図11〉

この鏡は、破損がなく、旧態をよく残している。鏡背文様は、連珠文圏によって、内外二区に分けられる。内区には宝相華文を上下左右の四方に対称的に配している。外区の四方には、それぞれ四羽の小禽のとまる宝相華文を中心にして、その周りに花文をめぐらせた図様を相対的に配置している。文様は、螺鈿技法により飾られている。「献物帳」記載鏡Kに当てられている。

〈第一二号　漆背金銀平脱八角鏡　図12〉

この鏡は、現在、破片十四片に銀板二片を補って復元されている。鏡背は、金銀平脱技法で飾られる。鏡背文様は、鈕を中心に宝相華唐草をめぐらせた鈕座をつくり、その周囲に含綬鶴四羽を配し、その間には鴛鴦・雁・花喰鳥・蝶・草花を置く。さらにその外周には、花枝を喰わえた鳳凰一羽を鈕を中心にして対称的に配し、その間に花枝・雲・宝相華を置く。文様は、いずれも右旋回にあしらわれている。平

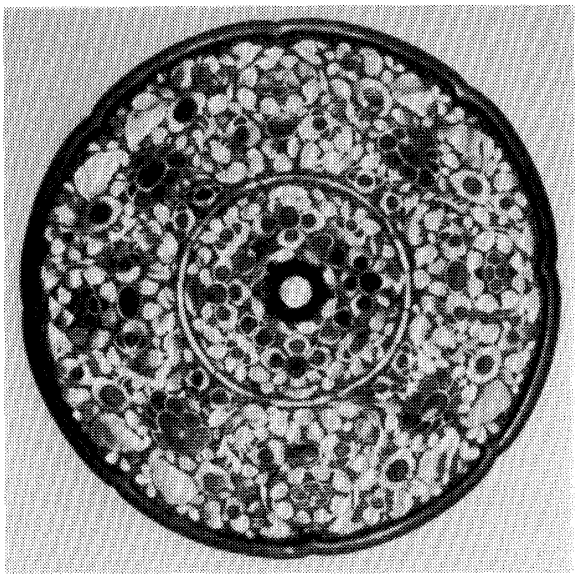

図7　平螺鈿背八角鏡　第7号

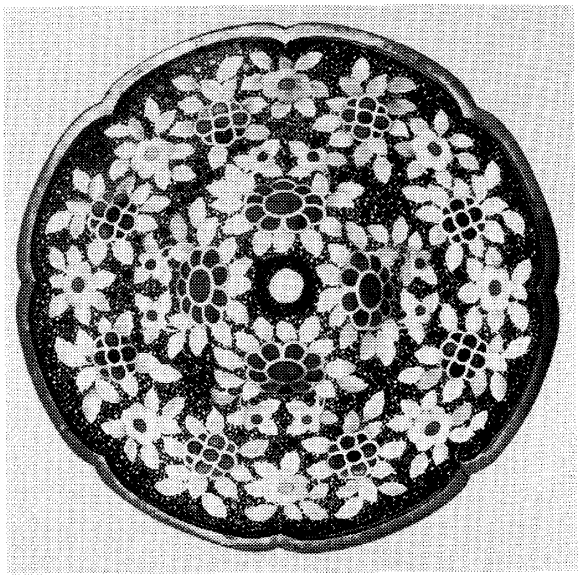

図8　平螺鈿背八角鏡　第8号

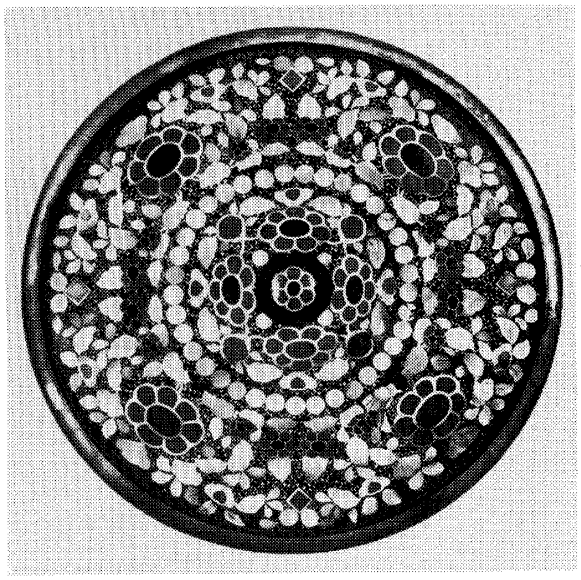

図9　平螺鈿背円鏡　第9号

脱文様の多くは新補されたものではあるが、鳳凰四羽のうち二羽は旧物である。「献物帳」記載鏡Lに当たる鏡と考えられている。

〈第一三号　平螺鈿背八角鏡　図13〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Mに当てられている。鏡背文様は、連珠文界圏によって内外二区に分けられる。内区には連珠文帯の鈕座をもつ円鈕を中心に宝相華文をめぐらす。外区には大きな宝相華文を四箇所に対称的に配し、その間に相対する双鳥を配している。文様は螺鈿技法で表現されている。

〈第一四号　花鳥背八角鏡　図14〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Nに当てられている。四十五片に破損したものに銀片七片を補って接合復元されている。鏡背文様は、花形の鈕座をもつ円鈕の周りに二羽の鸚鵡を回旋状に配置する。鸚鵡は嘴に葡萄の枝をくわえ、頸から綬をさげ、たなびかせている。

〈第一五号　花鳥蝶背八角鏡　図15〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Oに当てられている。鏡背文様は、素文の円鈕の周囲に六つの花文をめぐらせて鈕座とする。その外側を小鳥と草花と雲を組み合わせた図様を六箇所に配し、その間に蝶をあしらう。周縁部には草花・小鳥・蝶を交互に置く。鏡背面を六つに分割した文様構成である。

〈第一六号　槃龍背八角鏡　図16〉

この鏡は、「献物帳」記載鏡Pに当てられている。鏡背文様は、蓮葉を円形にかたどる鈕座にのる亀形の鈕を中心にして、その左右に双

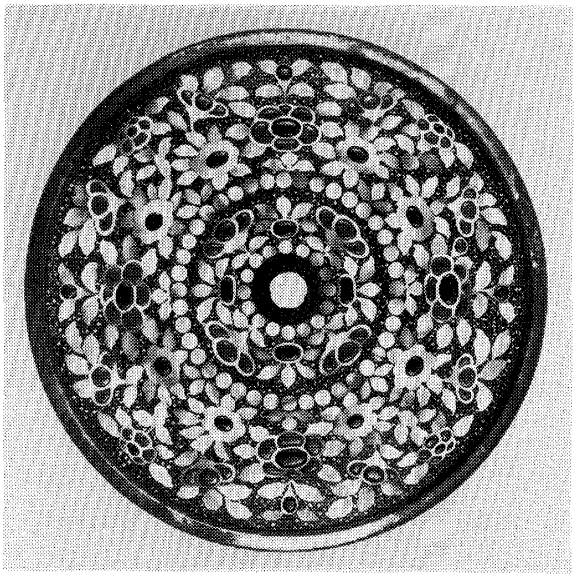

図10　平螺鈿背円鏡　第10号

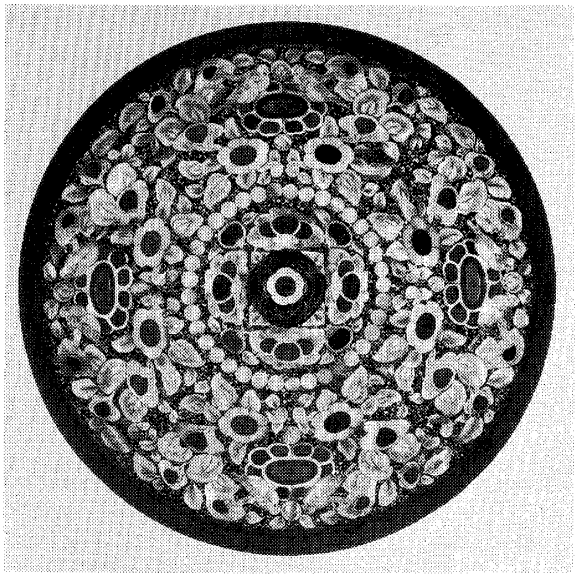

図11　平螺鈿背円鏡　第11号

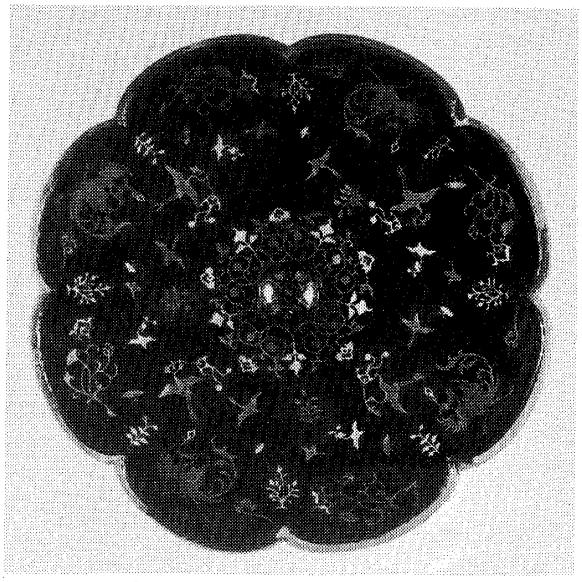

図12　漆背金銀平脱八角鏡　第12号

図16　槃龍背八角鏡　第16号

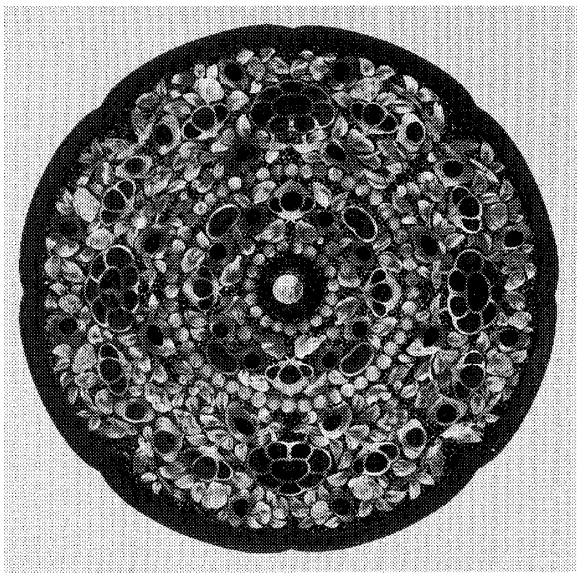

図13　平螺鈿背八角鏡　第13号

図17　雲鳥飛仙円鏡　第17号

図14　花鳥背八角鏡　第14号

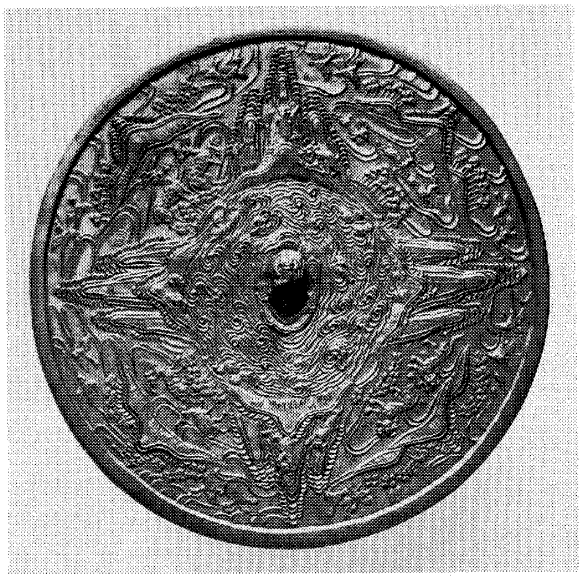

図18　山水鳥獣背円鏡　第18号

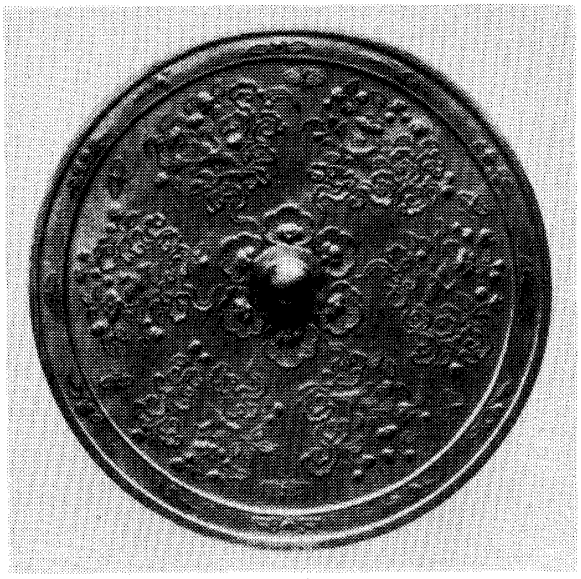

図15　花鳥蝶背八角鏡　第15号

龍を配す。上方部分には遠山、下方部分には鴛鴦が山すそにいる山岳を置き、空間には飛雲を散らしている。さらに外周部分には八箇の八卦文と山岳文を交互にめぐらす。

〈第一七号　雲鳥飛仙円鏡　図17〉

この鏡の鏡背文様は、円鈕の周囲に四岳を置き、これをめぐって仙人を乗せた霊鳥四羽を回旋させ、その間に山岳文と飛雲文を配している。この鏡は、形・重さ・大きさから「献物帳」記載鏡Sに相当すると考えられているが、「献物帳」の記載とに差異があり、記載鏡とする根拠が充分でないともいわれている。

〈第一八号　山水鳥獣背円鏡　図18〉

この鏡の鏡背文様は、楕円形をした山岳形の鈕を中心にして周囲の波濤の間に四岳をあらわし、遠景に遠山を連ねている。この景観の中に、虎・猿・獅子・水鳥・鹿・兎・飛鳥などを配す。この鏡は、寸法や重量から「献物帳」記載鏡Tに当てられるが、鏡背文様の記載とは合致しない点があり、「献物帳」記載鏡とする根拠が充分ではないともいう。

天平勝宝八年（七六五）に献納された「御鏡弐拾面」が、延暦六年（七八七）六月二十六日に正倉院に納められていたことは、その日に行われた正倉院宝物を曝涼した際の使者の報告書である「曝涼使解」に「御鏡弐拾面」と見え、その存在を確認できる（註7）。しかし、「献物帳」記載の鏡の二十面のうち、現存する鏡は、やや疑問の残る鏡を含めても十八面である。伝来する鏡と「献物帳」記載とを比較すると、鏡Q・Rに該当する鏡が紛失しているらしいことがわかる。

聖武天皇ゆかりの品々が紛失することは、ゆゆしき問題であるかもしれないが、「献物帳」記載の品々が、現存していないことは鏡に限ったことではない。一度献納された品でも時々の必要に応じて、正倉院の倉から持ち出されて使用された後、時には返納または品を替えての還納もあったが、出蔵のまま戻らなかったものが頗る多かったことはよく知られている（註8）。

「献物帳」記載の鏡についても、正倉院から持ち出された記録、つまり出蔵の記録が残っている。「雑物出入帳」によれば、弘仁十三年（八二二）三月二十六日に鏡五面が出蔵されたことがわかる。出蔵された鏡は、「八角鏡二面、一面花鳥鏡、重大五斤一両二分、径一尺一寸、一面鳥獣花鏡、重大四斤七両一分、径一尺二寸、円鏡三面、一面花鳥鏡、重大六斤五両、径一尺七寸、一面雲鳥鏡、重大四斤十二両、径九寸二分、一面山水鳥鏡、重大四斤十五両、径九寸二分」と記されているので、この鏡五面は、「献物帳」記載鏡のうち、八角鏡Q・Rと円鏡O・S・Tである。返納された時の記録は見当たらないが、円鏡O・S・Tは、正倉院に現存しているので、いつの時かはわからないが、返却されたのであろう。八角鏡Q・Rは現在、該当する鏡が見当たらないので、この時の出蔵されたあと返却されなかったのか、それとも一度返却されてから別の時期にもう一度出蔵されて、その後戻らなかったのかのいずれかであろう。出蔵や返納の記録がすべて残っている訳ではないので、紛失の時期について明確にはできない。

また、鏡E・F・G・H・I・J・L・Nの八面の鏡は、現在接合

復元されているものもあるが、一度破損していたことは、すでに述べたとおりである。これらの八面の鏡については、寛喜二年（一二三〇）十月二十七日に盗難にあい、一度紛失したことが明らかになっている（註9）。しかし、翌三年（一二三一）三月十四日に盗難にあった八面の鏡は壊されてはいたが、返納された記録がある（註10）。この時盗まれた鏡はふたたび正倉院に戻ってくることができたのだが、残念ながら破損したままの姿であった。破損した鏡が接合復元されたのは、明治時代になってからという（註11）。

鏡の収納箱についても、現存しているものが「献物帳」の記載と一致していないものもあることが報告されている（註12）。献納されてからの長い年月の間に、「御鏡弐拾面」もさまざまな場面に遭遇していたのである。

III

では、最近の中国における唐鏡研究の進展に目を転じてみることにする。

中国における銅鏡の研究は、北宋時代（九六〇～一一二六）からすでに行われてきた（註13）。拓影を集め、記録化がはかられるとともに、銅鏡に対して、形態と文様、銘文、鋳造技術の三方面からの研究が始められた。なかでも唐時代の銅鏡は、造形・題材・鋳造技術の面において独特の様式をもつものとして、中国銅鏡の歴史の上で、重要な位置を占めている。

近年、孔祥星氏が「隋唐銅鏡的類型与分期」を発表され、隋唐時代の銅鏡の分類と盛行年代について論じられた（註14）。さらに孔氏は劉一曼氏とともに『中国古代銅鏡』を世に送りだし、この著作の中で中国銅鏡の成立以後の展開が述べられている（註15）。もちろん唐時代の銅鏡についても、隋時代の銅鏡を含めて、分類と盛行年代とについて触れている。

ここでは、『中国古代銅鏡』の中でおこなわれている、銅鏡の分類を示しておくことにする。

a　四神十二生肖鏡類　四神鏡・十二生肖鏡・四神十二生肖鏡
b　瑞獣鏡類　瑞獣銘帯鏡・瑞獣花草鏡
c　瑞獣葡萄鏡類　葡萄蔓枝鏡・瑞獣葡萄鏡・瑞獣鸞鳳葡萄鏡
d　瑞獣鸞鳳鏡類
e　花鳥鏡類　雀繞花枝鏡・対鳥鏡
f　瑞花鏡類　宝相花鏡・花枝鏡・亞字形花葉文鏡
g　神仙人物故事鏡類　月宮鏡・飛仙鏡・真子飛霜鏡・三楽鏡・打馬毬鏡・狩猟鏡……
h　盤龍鏡類
i　八卦鏡類　八卦鏡・八卦百煉鏡・八卦十二生肖鏡・八卦干支鏡・八卦星象鏡・八卦双鸞鏡
j　万字鏡類
k　特殊工芸鏡類　金銀平脱鏡・螺鈿鏡・貼金貼銀鏡

この分類は、鏡背の文様あるいは鏡背の装飾技法によっておこなわ

れている。さらに、円形・葵花形（八花形）・菱花形（八稜形）などの鏡の形態による区分が加えられるが、ここでは省略する。

また、このような分類を踏まえて、銅鏡を出土する隋唐墓の発掘結果に基づき、各鏡の類の盛行の時期を次のように推定している。

四神十二生肖鏡類・瑞花鏡類の団花鏡・瑞獣鏡類は、隋から唐初に流行し、その下限は高宗の時代（六四九～六八三）におよぶ。瑞獣葡萄鏡類・瑞獣鸞鳳鏡類・花鳥鏡類の雀繞花枝鏡は、高宗・武則天および玄宗の開元年間（七一三～七四一）に流行した。花鳥鏡類の対鳥鏡（図19・図20）・瑞花鏡類（図21）・神仙人物故事鏡類・盤龍鏡・特殊工芸鏡類は、玄宗の天宝年間（七四一～七五六）から徳宗の時代（七七九～八〇五）にかけて流行した。また、八卦鏡類・万字鏡類・瑞花鏡類の亞字形花葉文鏡などは、徳宗の時代から晩唐にかけて流行し、下限は五代とする。唐時代の中でも玄宗の開元・天宝前後に唐鏡の最盛期を迎えたと結論づけている。

すなわち、隋唐鏡の発展史には、大きく三つの段階があることになる。それは①隋から高宗代、②高宗から徳宗代、③徳宗から晩唐・五代の三期に区分されるのである。

さらに②の時期は、二つの段階に分けられる。第一段階は、高宗・武則天時代の七世紀後半から八世紀初頭である。第二段階は、玄宗から徳宗の時代の八世紀の間である。この第一段階の鏡背文様にみられる特徴は、瑞獣の題材が次第に二次的な位置へ退き、替わって飛禽と花枝が主要な地位を占めていく所にある。つまり、この時期は瑞獣か

図19　対鳥鏡・双鸞銜綬花枝鏡

図20　対鳥鏡・双鸞銜綬鏡

図21　瑞花鏡類・花枝鏡

ら花鳥へと変化していく過渡的形態にあり、花鳥鏡の出現、盛行に至る。さらに鏡の形態も、菱花形・葵花形などの花形鏡があらわれ、文様の内容と形とが結びついていく。この第二段階の文様の特徴は、植物文様が従属的な地位から脱し、瑞花・樹花が主要な題材に成長するところにあると分析できる。

このような近年の研究成果をもとに、正倉院に伝来する「献物帳」記載鏡をみてみたい。

孔氏らの分類によると、鏡A・Bは瑞獣鸞鳥鏡類に分類できる。内区の文様だけをとりあげて分類するならば、鏡Aは花鳥鏡の対鳥鏡、鏡Bは花鳥鏡の雀繞花鏡となる。鏡Cは瑞獣のある対鳥鏡、鏡E・F・G・H・I・J・K・L・Mの九面は特殊工芸鏡類、鏡Nは花枝のある対鳥鏡、鏡Oは鳥・虫のある瑞花鏡、鏡Pは八卦のある盤龍鏡類、鏡S・Tは神仙人物故事鏡類ということになるのではなかろうか。鏡Dは鏡背文様がないので、ここでは分類できない。現在紛失してしまっている鏡Q・Rの分類は確認できないが、「献物帳」に記載された所から推測すると、おそらく対鳥鏡を基本に瑞獣や瑞花がちりばめられた文様構成、もしくは瑞花鏡を基本に瑞獣や瑞鳥をめぐらせた文様構成であったかと思われる。

このように、「献物帳」記載の「御鏡弐拾面」を分類してみると、これらの鏡が盛行していた年代が、②の時代の第二段階、それも玄宗の天宝年間以降のころに集中していることに気がつく。つまり、「献物帳」記載の鏡の多くが、八世紀後半に制作された可能性が非常に高いということが唐鏡盛行年代の推移からいえるであろう。

IV

では八世紀後半期に中国で制作されたと思われる「献物帳」記載の鏡は、いつ我が国にもたらされたのであろうか。

中国に対して強い関心をもっていた聖武天皇のゆかりの鏡であるから、遣唐使たちが持ち帰ったものとみてまちがいあるまい。「献物帳」記載の鏡がその大きさや装飾技法などから唐からの舶載鏡であろうことは、すでに以前より考えられていたが、これらの鏡に対するX線分析調査が宮内庁正倉院事務所の手によっておこなわれ始めたことで、なお一層その感が強まってきたといえる（註16）。

その分析結果によると、「献物帳」記載の鏡の化学組成は、銅約七十パーセント、錫約二十五パーセント、鉛約五パーセントであるという。前漢時代から唐時代に制作された中国銅鏡の標準的成分配合比は一定しており、この配合比と「献物帳」記載の鏡の化学組成とは、ほぼ一致することが確かめられたのである。つまり、「献物帳」記載の鏡は中国で制作され、我が国にもたらされたことを科学的な調査により裏づけられたことになろう。

聖武天皇即位から崩御までの間には、遣唐使は二度しか派遣されていない。聖武天皇に鏡が渡されたのは、このいずれかの帰国の時ではなかろうか。

一度目は、天平四年（七三二）九月に遣唐船四艘を造らせて準備を

し（註17）、翌五年（七三三）四月三日に出発した遣唐使帰国の時である（註18）。この時の遣唐使は、天平七年（七三五）三月に入唐大使が帰朝の挨拶を聖武天皇におこなっている（註19）。天平八年（七三七）八月には、帰国の遅れた入唐副使が拝朝している（註20）。

聖武天皇の在位中の派遣はこの一度だけで、八世紀前半のことである。聖武天皇ゆかりの鏡もこの遣唐使帰国の時に献上されたと考えたいところだが、鏡の盛行した年代とは十数年の開きがあり、少し早いと思われるので、この時聖武帝が鏡を手にしたのではなかろう。

二度目は、孝謙天皇に譲位してから派遣された遣唐使帰国の時である。この時の遣唐使は、天平勝宝四年（七五二）閏三月三日に拝朝の後、同月九日に出発の運びとなった（註21）。帰国は、天平勝宝五年（七五三）の暮れから翌六年（七五四）にかけて、数回に渡る。最初の拝朝は、六年正月三十日のことである（註22）。同年三月十日に、山科陵に奉じた唐からの信物は、当然、この時の遣唐使が持ち帰ったものであろう（註23）。

天平勝宝六年は、八世紀の中頃である。「献物帳」記載の鏡の盛行年代ともほぼ同時期といえる。ならば、「献物帳」記載の鏡が我が国にもたらされたのは、この時帰国した遣唐使によるものではなかろうか。次の遣唐使派遣は、天平宝字三年（七五九）二月の出発である。（註24）。鏡の盛行年代に関しては問題がないのだが、この時すでに鏡を手にする聖武天皇は崩御されており、「御鏡弐拾面」も光明皇太后により東大寺盧舎那仏に献納されているのだから、天平宝字三年出発の遣唐使帰国によりもたらされたことは有り得ないのである。

V

天平勝宝八年（七五六）六月二十一日に東大寺盧舎那仏に献納された聖武天皇ゆかりの品々は、その数六百数十点に及ぶ。「献物帳」に記載されたこれらの品は、千年の時を越え、現在、東大寺正倉院に伝来するものも少なくない。本論で考察の対象とした「御鏡弐拾面」も、十八面が伝えられている。

本論では、この「御鏡弐拾面」の現存する十八面の鏡を中心に、まず「献物帳」の記載を検討した。次いで、鏡の特徴たる鏡背文様の観察を個々の鏡についておこなった。また近年の唐鏡研究の成果に照らし合わせることにより、現存する鏡十八面の「唐鏡」における位置付けを試みた。

その結果、「献物帳」の記載の鏡は、鏡背文様の変遷や装飾技法の発達などからみて、中国八世紀中葉以後に盛行した唐製銅鏡であることがわかり、唐鏡の最盛期に制作された鏡であった。さらに、これらの鏡は天平勝宝四年（七五二）に出国し、同六年に帰国した遣唐使によって、聖武帝に献納された鏡であることを指摘した。このことから、遣唐使の持ち帰った鏡は、まさに唐において盛行していた鏡であったことがわかる。それらの鏡を、聖武帝は天皇位を退いてから手にしたのであり、聖武帝崩御後に、光明皇太后が聖武帝ゆかりの鏡として東大寺盧舎那仏に献納したのである。

本論でとりあげた「献物帳」記載の鏡は、我が国に伝来する鏡であるが、それと同時に「唐鏡」最盛期の鏡として位置づけられる。近年中国における唐墓の発掘調査により発見された「唐鏡」は、鏡の制作・盛行年代を考察する新資料として、「唐鏡」の全体像を摸索するのに重要な役割を担うことになった。しかし、それらの鏡の多くは、墳墓の中に納められていた鏡という事情もあり、保存状態のよかったものは多くない。それに比べて、正倉院伝来の鏡は、千三百年もの間大切に保管されてきたこともあり、唐時代当時の鏡として鑑賞に耐え得るものも多く、「唐鏡」の、それも最盛期の代表作例として位置づけることができるのである。

正倉院には、「献物帳」記載の鏡十八面以外にも、三十八面の鏡が伝わっている。それらの鏡については、いつ正倉院に納められたのかよくわからないことが多い。また鏡の制作地についても、中国と思われるものもあれば、我が国と考えられるものもある。このため「唐鏡」として取り扱うには、やや注意を要するので、今回は考察の対象から外しておいた。いずれそれらの鏡も含めて、「唐鏡」を総括すべき時が来るように思う。

また、今回とりあげた鏡だけではなく、その他の「献物帳」記載の品々に対する考察も、我が国の文化・美術だけではなく、中国唐時代の文化・美術を考える上で、重要な位置を占めうる可能性が高いことをあらためて指摘しておきたい。

（本学講師＝芸術学担当）

〈註〉

註1　『続日本紀』天平勝宝八年五月二日条。

註2　『国家珍宝帳（東大寺献物帳）』（『大日本古文書』編年四　東京帝国大学史科編纂所編　東京大学出版会）

註3　正倉院の宝物については、『日本の古寺美術別巻　正倉院』（宮治昭著　保育社　一九八六）に詳しい。

註4　正倉院に伝わる鏡を考察したものに、梅原末治「正倉院の御物鏡について」（『書陵部紀要』第七号　正倉院特集　宮内庁書陵部　一九五六）がある。

註5　孔祥星「隋唐銅鏡的類型与分期」（『中国考古学会　第一次年会論文集　一九七九』文物出版社　一九八〇）・孔祥星『中国銅鏡図典』（文物出版社　一九九二）

註6　帝室博物館『正倉院御物棚別目録』

註7　奈良国立博物館発行『昭和五十七年　正倉院展目録』（一九八二）にこの文書が写真掲載されている。

註8　松島順正「献物帳所載の御物と現存品について」（『書陵部紀要』第七号　正倉院特集　宮内庁書陵部　一九五六）

註9　『東大寺続要録』（『続々群書類従』第十一　国書刊行会　一九〇八復刊　一九六九）。またこの盗難事件については、『正倉院小史』（安藤更正著　国書刊行会　一九七二）に詳しい。

註10　「御物納目散帳」（『大日本古文書』　東京帝国大学史科編纂所編　東京大学出版会）

註11　正倉院事務所編『正倉院の金工』（日本経済新聞社　一九七六）

註12　正倉院事務所編『正倉院の漆工』（平凡社　一九七五）・正倉院事務所編『正倉院の金工』（日本経済新聞社　一九七六）・正倉院事務所編『正倉院の木工』（日本経済新聞社　一九七八）などに詳しい。

註13　『宣和博古図録』（宋・王黼編）には一一三面の鏡が収録され、漢唐二つの時代に分けている。

註14　前掲註5

註15　この『中国古代銅鏡』（文物出版社　一九八四）は、『図説中国銅鏡史』（高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳　中国書店　一九九一）として翻訳されている。

註16　『正倉院年報』（宮内庁正倉院事務所）に第八号（一九八七）以後、鏡の成分の分析結果が毎年報告されている。

註17　『続日本紀』天平四年九月四日条。

註18　『続日本紀』天平五年四月三日条。

註19　『続日本紀』天平七年三月十日条。

註20　『続日本紀』天平八年八月二十三日条。

註21　『続日本紀』天平勝宝四年閏三月三日条。同年同月九日条。

註22　『続日本紀』天平勝宝六年正月十六日条。同年同月十七日条。同年同月三十日条。

註23　『続日本紀』天平勝宝六年三月十日条。

註24　『続日本紀』天平宝字三年二月十六日条。